

T A O

2009.04.22

ある日、ふくろうは 夢を見ました。

森を抜けた先には、草原がある。

おひさまの光の中、
ふくろうと 白うさぎは、手をつなぎ、その草原を 走っている。

とつぜん、白うさぎが、草に 足を取られて、倒れてしまう。

大丈夫かい！？

顔を上げた白うさぎは、心配そうな ふくろうの顔を見て、
キラキラと笑う。

ふたりは また 起き上がり、草原の中を どこまでも 駆けてゆく。

はっと 目を覚まし、ふくろうは、ほお と ため息をつきました。

もう 何度めでしょう。
この夢を見るのは。

ふくろうは もうすでに 何度も、この夢を 見ているのです。

窓の外では、
まだ 午後の陽ざしが さんさんと 降り注いでいるようです。

まだ少し、眠れるな。

その昔、昼の世界に身を置いていたこともある ふくろうですが、
夜の世界を 取り仕切るようになって、もう 数十年。
いつしか 太陽の光を とげとげしく 感じる体になっていました。

このところ、例の夢のせいで 寝不足気味の ふくろうは、
頭から毛布を被り、ふたたび とろとろと 眠りに落ちていきました。

白うさぎは、ぴくん、と 耳を反らせました。

また、誰かが、わたしのことを 呼んでいる。

白うさぎは いつものように、全身を耳にして、
そっと あたりの様子を うかがいました。

が、やはり、いつものように、
なんの気配も 感じられません。

もう 何度めでしょう。
姿を見せない どこかの誰かに、名を呼ばれるのは。

森の奥深く、お気に入りの切り株に腰をかけ、
白うさぎは しばらくの間
ものおもいにふけているのです。

おひさまが沈み、森には 夜が やってきました。

ふくろうは 117番で 時報を確認すると、
いつものように 時間ぴったりに
大きなもみの木の枝に 座りました。

ありえない。
ありえないことだ。

ふだんから落ち着いた物腰の ふくろうではありますが、
最近の彼は、どうにも 心は うわの空でした。

あの夢のせいです。

この森のことを熟知している ふくろうは、
どんなに奥深くまで行こうとも、その先に草原があらわれることはない、
ということを知りも よく 知っていました。

それに、なによりも。
白うさぎと自分が 一緒に走る、なんて。

自分は、飛ぶことは出来るけれど、走ることはできない。

自分は、夜ならば 森を自由に飛び回ることができるけれど、
昼間は 陽の光が まぶしすぎて
自分の部屋すら 出ることができない。

それなのに、なんだろう。
この胸の中の落ち着きのなさは。

なぜ あんなにも楽しげに、自分と白うさぎは 走っているのだろう。
なぜ あんなにも キラキラと、白うさぎは 輝いているのだろう。

そして。
なぜ こんなにも ぶるぶると、自分の胸の奥は ふるえているのだろう。

冷静沈着を装いながらも、このごろの ふくろうは
どうにも うわついた気持ちを 抑えられずにいました。

昔の自分だったら、可能だったろうか。

ふくろうは、思考の部屋の、別の扉を開けました。

数十年前は、白ふくろうとして、
昼間も 自由に飛び回ることのできた、彼でした。

その頃は、2本の足を 器用に繰って、走ることも できました。

しかし、あの事件があつて以来。

白ふくろうは、大鳥の爺さんに頼んで、
自慢の白い羽根を 限りなく黒に近い茶色に染め替えてもらい、
この夜の世界へと 身を転がしたのでした。

あの頃の自分であつたら。
美しい白ふくろうであつた頃の自分なら。

昔のことを思い出すのは、久しくなかったこと。

はるか昔の自分を すっかり切り離してしまっている ふくろうは、
もうひとりの自分が どんどんと 胸の扉を叩いているように
感じていましたが、
その音に 耳を傾けるつもりはありませんでした。

あれは、もう、終わったのだ。

ふくろうは、ほお と ひと声 しぼりだすと、
ぶるぶると首をふって、思考の部屋から 抜け出しました。

そのときです。

がさがさっ
がさがさっ

もみの木の下のかさむらが、かさかさと 音を立てました。

ふいをつかれて身構えるふくろうの視界に、ぴよん、と 入ってきたのは、
いつも 夢の中にあらわれる、可憐な白うさぎでした。

びっくりして、目を さらに大きく見開いている ふくろうを、
白うさぎは きょとん、と 見上げ、
夢の中のように キラキラと 笑いました。

あなただったのね？
わたしを呼んでいたのは。

白うさぎは、左耳を 深く折り曲げると
両手で いちど つかんでから、
ぱっと 手を離しました。

それが なにを意味する動作なのか わかりませんでした、
とにかく、突然の白うさぎの出現に 度肝を抜かれた ふくろうは、
なにもいえず、ひとこと、ほー とだけ
息を吐き出しました。

その夜から、白うさぎは、
たびたび ふくろうのところへ やってくるようになりました。

白うさぎが 姿を見せることは、
ふくろうにとって、このうえない 喜びでしたが、
同時に、なぜか 胸の奥で ざわめくものを 感じさせることも
ありました。

これは、恋に違いない。

分析好きな ふくろうは、自分の感情の動きを じっと観察し、
そう結論付けました。

あなたのところに来るときは、
お昼寝しているから、大丈夫よ。

そういいながらも、ときおり 小さくあくびをする、白うさぎ。

その可憐な存在そのものが、ふくろうにとっては
暗い闇夜を照らす、ほのかな ろうそくの灯のようでした。

その ほのかな光を 抱きしめながらも、
胸の奥のざわめきに耳を貸すことなく、堅く鍵をかけている。

それでも、ふくろうは、十分に 幸せでした。

幸せだ、と 思っていました。

白うさぎが ふくろうのところへ 通うようになってから、
どれくらい 経ったでしょうか。

この頃には、ふくろうも、
白うさぎとの将来を 夢みるまでになっていました。

堅実すぎるくらい の ふくろうの性格を 知ってか知らずか、
白うさぎは いつも 明るく、優しく 彼の心を ほぐしてくれました。

しかし、ふくろうは、
自分の過去を 白うさぎに 告げることが できませんでした。

この、穏やかな ふたりの関係が 永遠に続けばよい。

そう 願いながらも、ふくろうは、
常に なにかに 脅かされているような、そんな 一点の曇りを
心から 拭い去ることができずに いました。

ある晩のこと。

いつものように 白うさぎが くさむらを かき分けて
大きなもみの木の根元まで やってくると、
ふくろうは、注意深く 木の下へと 降りてきました。

そのとき、とつぜん。

得体の知れない 大きな黒い波のようなものが、
もみの木の後ろから 姿を あらわしました。

その黒い波のようなものは、
くねくねと うねりながら、さらに 大きく立ち上がると、
白うさぎの背中から 飛びかかり、彼女を 飲み込もうとしました。

あぶないっ

ふくろうは、大きな羽根を広げて、
白うさぎを 丸ごと 包み込みました。

ぐるぐると、めまいが するように、世界が 大きく 揺れ動き、
濃く磨った墨汁のような感触が ふくろうの体を 襲いました。

荒波に飲み込まれたかのような
すさまじい 生に対する恐怖と、息苦しい時間が、
長い間 続いていました。

それでも、ふくろうは、
白うさぎを守るため、大きな羽根で しっかりと 彼女を抱きしめたまま、
黒い荒波の中、必死で 大地に踏ん張っていました。

ああ、もう ダメだ。

大きな一撃により、
ふくろうは、とうとう 地面から 引きはがされて
真っ黒な荒波に 吸い込まれてしまいました。

ものすごい風圧とともに、
全身に、食いちぎられるような痛みが 走りました。

それでも ふくろうは、
白うさぎを包んだ両手の羽根だけは、開くことなく、
彼女を 守り通しました。

意識を失いかけた ふくろうを、
黒い墨汁のような波は、あざ笑っているかのようでした。

なにが あったのでしょうか。

急に、なにもかもが 一瞬のうちに 引き下がり、
かつてないほどの静寂さが ふたりを 包みこみました。

ふくろうの大きな羽根の中で、
白うさぎは ぶるぶると震えていました。

その振動が、ふくろうの胸へと伝わりと同時に、
温かな感触が ふわ一つと
彼の中心に 流れ込んできました。

あ、これは・・・

ふくろうは、目を大きく見開きました。

この感覚は、
ふくろうが、昼の世界に置いてきてしまったものでした。

あの事件以来、すっかり 自分の心を閉ざし、
いちばん奥の奥、自分でも手の届かない部屋へ
置き去りにしてきたもの。

長らく 忘れていたもの。

自分には もう 関係ない、と、探すことさえもしなかったもの。

でも確かに、かつて 自分の中に存在し、
そして いまも なお、存在しつづけているもの。

ふくろうに しみついていた恐怖は、
するすると 溶けていきました。

怖かったのは、外の明るい世界ではない。
自分の心の中の暗闇だったんだ。

ふくろうは、自分が うっすらとした 淡い光に 包まれているのを
感じていました。

失うことを怖れて 固く閉ざしていた 羽根を、
いま、白うさぎを守るために、大きく開いてしまった。

白うさぎを 腕の中へと迎えたいま、
自分の心は どうなってしまうのだろう。

おそる おそる…

新米の手品師が、自分の手品の結果を 確かめるかのように、
ふくろうは、ふたたび、そっと 羽根を 広げました。

そこには、白うさぎは いませんでした。

しかし、ふくろうは 驚きませんでした。

どこかで、そのことを 知っていたからです。

あれは・・・自分だったのだ。

ふくろうは、大きく広げた羽根を そのままに、つぶやきました。

あれは・・・

白うさぎではなかったのだ。

自分が自分で閉じ込めた、白ふくろうの頃の自分だったのだ。

ふくろうは、静かに うなずくと、
ゆっくりと 傷ついた羽根を、たたみました。

ふくろうの思い描いていた夢は、消え去りました。

白うさぎに向けていた ふくろうの不器用な愛も、
ぐるりと空回りして、自分の胸に 戻ってきてしまいました。

あとに残ったものは、なにも ありませんでした。

それでも、ふくろうは、幸せでした。

いままでになかった安堵感。

曇りのない 安らぎ。

ふくろうは、ゆっくりと 目を閉じました。

森を抜けた先には、草原がありました。

おひさまの光の中、
白ふくろうと 白うさぎは、手をつなぎ、その草原を 走っていました。

どこまでも、どこまでも。
ふたりは 草原の中を どこまでも、駆けてゆきました。

そして、いつしか 彼らの足は 地面を離れ、
草を超え、木々を超え、雲を超えて。

4枚の白い羽根を 大きく羽ばたかせ、
青くすきとおる 広い広い空に、吸い込まれていきました。

あくる日の朝。

ふくろうの座っていた 大きなもみの木の枝には、
不思議な色と形をしたものが ぶら下がっていました。

その 不思議な色と形をしたものは、
風に 揺れることもなく
ただ なにかの不在を 証明しているかのように
見えます。

森の動物たちが
ふたりの姿が 見あたらないことに 気づくまでには、
まだ すこし、時間が かかりそうでした。